

保育者養成課程において育みたい資質・能力に関する研究 — 幼児理解を深めるといふ観点から —

西垣吉之¹⁾・梅田裕介¹⁾

A Study on the Being Developed Specialties in the Nursery Teacher Training Course — From the Deepening Understanding of Infants —

Yoshiyuki NISHIGAKI and Yusuke UMEDA

本研究では、現代の学生の実態及びそこから明らかになった課題を出発点として、「深い幼児理解」に焦点を当てて研究を行った。深く幼児理解をすることで、浅い幼児理解では見えて来ない「保育者としての専門性」について明らかにし、それを「幼児理解を深める中で育つ多様な専門性」として整理した。子どもが主体となり活動を生み出す過程に寄り添う力、保育者が予想した活動以外の活動が生まれてくることを期待をもって待つ力、幼児の感情の動きに寄り添い幼児の心の動きを推察する力等、8点の専門性を明らかにした。さらに、養成校の段階でそれらの専門性を身に付けることの重要性について触れ、今後の養成校のあるべき視点として6点で整理した。学生が抱える課題を保育者として現場に出る前に、少しでも乗り越えられる養成が今後必要なのではないかという点について示唆を得ることが出来た。

キーワード：教育課程・幼児理解・多面的・保育者の専門性・保育の魅力

はじめに

1 昨今の学生の実態

保育者養成大学においては、専門職として保育における多様な専門性を学生時代に育むことが求められる。しかし、そこで学ぶ学生の実態は時代の経過に伴い大きく変容し、いろいろな面で弱さをもつ学生が増えてきていると考える。筆者が勤務する保育者養成大学の学生の一例を挙げると、①物事を捉える際の視点の狭さ、②思考を広げることに対する弱さ、③一面的な判断による多面的に捉えることの困難さ、④今と未来を繋げて捉え今どうするかを考える力の弱さなど、総じて「背景や気持ちを深く思考し想像すること」に対して弱さを感じられる。また、⑤自分自身の願いを優先させる、⑥いろいろなこと

に耐える力の乏しさ等も弱さとして挙げられる。

田畑(2018, p.226)は現代の若者について「『全面的つきあい』を減少させ、『部分的』『形式的』つきあいを増加させている」と述べている。これは若者の人間関係の希薄さを示した文章である。これを若者の物事へかかわる姿勢という視点で見ると、部分的・形式的という表面上のみの思考や判断、やりとりを重視し、よくいえば効率的に物事にかかわっていると捉えることが出来る。しかしここからは先の6点の学生の実態と同じく、物事の本質を追究し、背景や気持ちを想像したり思考したりしながら、じっくりとかかわることに苦手意識を感じている学生の実態が見えてくる。

これらの実態・弱さは、筆者の大学のみならず、現代の学生の課題といえるのではないだろうか。

1) 教育学部子ども教育学科

2 問題提起

保育所保育指針では「保育士等と子どもの間にコミュニケーションが図られ、信頼関係が一層確かなものになる」(厚生労働省, 2018, p.279)とされ、「保育士等が一人一人の子どもの気持ちを汲み、適切に応答していくこと」(厚生労働省, 2018, p.36)、「子どもの気持ちや欲求などの目に見えない心の声を聴き、その子どもの内面を理解しようとする事」(厚生労働省, 2018, p.205)の大切さについて繰り返し述べられている。保育とは子どもとコミュニケーションを取りながら、子どもの姿やつぶやき等それら全てからその子の内面を理解し、展開されるものである。室田(2016, p.9)は「保育者が子どものことを“わかる”ことが子どもの“心の育ち”に、遊ぶ子どもの“遊びたい気持ち”が子どもの“心の豊かさ”に寄与して、子どもの心は“育まれる”のではないのでしょうか」と述べている。保育者の内面理解に支えられることで、子どもは安心して主体的に環境に働きかけ、遊びを充実させ、学び成長していくといえる。すると、保育においては、保育者が子どもと適切なコミュニケーションを図り、子どもの内面理解に努めることが極めて重要な専門性であるといえる。

しかし、前述したような学生の実情を鑑みると、養成課程において、学生が幼児との豊かなコミュニケーション能力や内面理解の力を身に付けていくことがそれほど容易でないことは想像に難くない。今学生が抱えている力の不足が、子どもの成長を妨げるものであるとすれば、養成校として指導上、どのような配慮が必要であるかに真剣に向き合う必要がある。

I 研究の目的・方法

前述のように養成校は、保育者としての専門性を育む場である。専門性とは何かを考えてみると、「乳幼児の内面を理解する力」「発達を捉える力」「環境を構成する力」「指導計画の立案力」「保護者を支援する力」など多岐に渡る。本稿ではその中でも、先の実態を受けて「乳幼児の内面を理解する力」に焦点を当てる。

大学に入学してくる養成校の学生は、それまで幼児を理解するという視点を持ち合わせているとはい

い難い。大学養成課程において様々な事例検討を通して、幼児の内面を理解する機会を積み重ねることで、理解の深まりを経験し、さらにそれまで感じとれなかった保育者に求められる独自の専門性を明らかにしていく必要がある。さらに、養成校は、最終的に保育者としての専門性、つまり保育者として身に付けておかなければならない力を整理し、それをどのように具体化出来るのかを学ぶ場でなければならないと考える。

以上を踏まえ本研究では、深く幼児理解を行う過程を通し、保育者に求められる独自の専門性(力)を明らかにし、それらを身に付けていくためには、養成校をどのような学びの場にする必要があるかについての視点を明らかにすることを目的とする。

研究は以下の手順で行う。まず始めに文献調査を行い、先の現代の学生が抱える課題を受け、養成校学生の幼児理解の在り方についての実態を簡潔に整理する。その後、筆者が抽出した2つの事例を、幼児の姿に見られる育ちを多様な視点から分析的に捉える中で、保育者に必要な専門性を明らかにする。それを、「幼児理解を深める中で育つ多様な専門性」として整理し、深い幼児理解と合わせて、養成校での指導の在り方について僅かばかりの提言が出来ればと考えている。

II 養成校学生の幼児理解

椛島香代は「保育における幼児理解のあり方—保育学科学学生の幼児理解の実態分析を通して—」という論文の中で、学生の幼児理解の実態や深まりについて、学生から提出されたエピソードを分析し、調査を行っている。その結果、以下のような学生の傾向が見受けられた。

- ・行動の意味づけで終わり、そこから何が出来るかまで言及出来ていない
- ・明確な問題意識をもち子どもの姿を具体的に捉えながら考察することは難しい
- ・「遊んでいる」等の概念的な捉えが多く、その具体についてまでの読み取りには至らない
- ・未満児の徐々に行動が変化する様子からは、その内面を読み取ることに困難が伴う

(椛島, 2008)

また、同様の調査からは、「子どもを理解できた

と記述があっても、子どもの発達過程についてであったり、その場のかかわり方の方法であったりと、子どもの内面やその行動に至るまでの背景を踏まえて子どもを理解しているとはいえない（下線は筆者による）」との報告もある（北村ら，2018，p.53）。

以上から考えられることは、「背景や気持ちを深く思考し想像すること」を課題とする昨今の学生にとって、あるいはそもそもの現在の養成校の養成課程においては、表面的な内面理解までしか学びが至らないことが読み取れる。さらには、学生はその表面的な内面理解で、下線にあるように子どもを理解した気持ちになっていると思われる。

専門職と呼ばれる保育者にとって、これは極めて残念なことであり、大きな課題として残るところである。そこで、以下、事例の分析を通し、深い幼児理解とは何か、そして、保育者の専門性について明らかにしていく。

Ⅲ 事例分析から見る保育者の専門性

以下、2つの事例をより深い視点で分析を行う。読み取りの項にある「四角囲み文字」は、その結果明らかになった専門性を示している。

1 事例1—5歳児A男の事例—

(1) エピソード「戦いごっこの盾作り」

5歳児A男が15cm×20cmの発泡スチロールトレイの底に、ラップの空き箱を立てるように縦長に付け、戦いごっこに利用する盾を作っている。A男は空き箱の一側面に長く切ったセロテープを付け、トレイまで伸ばして固定しようとした。一面だけでは上手く付かないと思ったのか、反対の面も同じように固定しようとする。そして空き箱で作った持ち手を掴み、少し振ってみるが取れそうになった。すると今度は空き箱の他二面もセロテープで固定し始めた。固定し終わり再度少し振ってみると、セロテープの吸着力が弱くすぐに取れてしまった。すると、A男は担任を呼びに行き、「くっつかない」と訴えた。担任はそれを聞き「ガムテープでやってみたら？」と伝える。それを聞いたA男は躊躇なくガムテープを取りに行き、付け始めた。セロテープの時と同様に、空き箱のそれぞれの側面が隠れる位に長く切ったガムテープで、空き箱とトレイを固定し始めた。

ラップの空き箱の他の三つの面も同じようにガムテープを利用して固定し、その後戦いごっこを始めた。

(2) 読み取りと考察

子どもが主体となり活動を生み出す過程に寄り添う力

この保育場面は、廃材に加え様々な造形材料が準備されている環境下で表われた活動である。この園では、子どもが自由に制作する場を日頃から環境として設定している。領域「環境」内容8においても、子どもが対象にじっくりかかわることが重要であり、工夫することが出来るようにするために「このような子どもの力を信頼し、その上でどのような援助が必要か考えていくことが大切」とされている（厚生労働省，2018，p.237）。まさしく、それを願って工夫された環境構成であろう。A男はこの活動に取り組みながら、どのようにすれば空き箱がトレイに固定出来るか思考している。空き箱を固定することはA男にとって、自己課題である。子どもの自己課題を捉え、その自己課題に向けて子ども主体で試行錯誤することが、子どもの育ちを促すために必要であることはいうまでもない。A男は日頃から戦いごっこが好きで、よく友達と戦いごっこをしていた。その流れでA男は戦いごっこをより面白くするため盾を作ろうとしたのだと考えられる。子どもの中に、遊びでこれがあればより面白くなるだろうと思い、何かを作り始めることがある。その際、それを作るための環境が存在することで、子どものイメージを実現する過程が生まれ、よりリアルな遊びが展開していく。そのため、盾を作るという課題を達成するため、途中で諦めることなく最後まで果敢にこの活動に取り組んだと思われる。このように、保育者は子どもの力を信じ、適切かつ柔軟な環境構成や援助を行い、子どもが活動を生み出す過程を共に楽しみ、寄り添っていくことは重要な専門性であるといえる。

保育者が予想した活動以外の活動が生まれてくることを期待をもって待つ力

上記で環境構成という言葉を用いたが、本事例における環境は、保育者のどのような幼児の実態把握

から構成されたものだろうか。考えられることとして、盾が実際にあることで、友達と共有のイメージをもつことに繋がり、戦いごっこがよりリアルに展開するかもしれないという予測があったのかもしれない。しかしこのケースでは、廃材や造形材料が常に準備されているということから、そうした個別の子どもへの具体的な実態把握はされていなかったと思われる。むしろ、保育者の中にあっただのは、こうした環境を構成することで、子ども達がそれらの環境を取り込みながら、どのような遊びを展開するだろう、どのような活動が生まれるだろうという期待ではないか。そこから今後生まれてくる活動を「楽しみに待つ」という保育者の姿勢を感じる事が出来る。

保育は、子どもの実態を把握し、その実態把握に応じたねらいや内容の立案、環境構成という一連の流れによって組み立てられる。一方で、保育者が全く予測しなかった活動に展開し、驚かされることもしばしばある。このように保育者が事前に予測した活動以外の活動が生まれることも、子どもが真に主体として環境にかかわり、豊かな活動を展開している姿として捉えることも出来る。つまり、保育者の予測を超える活動が生まれることを、期待して待つことが出来る力も保育者にとって重要な専門性の一つではないだろうか。

生きる力を身に付けるという観点で、広く長期的な視野からその子の活動や育ちを捉える力

A男は自己課題に向け、果敢に活動に取り組んでいたが、そのうち思い通りにならないことに苛立ったことだろう。しかし、彼が抱いた課題、つまり持ち手を盾本体に固定するという課題を、最後までやり遂げようとする強い意志がA男にはあった。そのため、諦めなかったのだと思われる。また、盾を作ろうとした段階で、すでにその盾を使って戦いごっこをしている自分の姿を想像出来ていたと考える。このように自分の未来の姿をイメージ出来るからこそ、幼児は、今の課題をもち堪えることが出来るようになっていくともいえる。

さらにこの活動では、保育者からの提案ではあったが、A男はセロテープで上手いかなければ、ガムテープで固定することが出来るということを学ん

でいる。おそらくこの提案を素直に受け入れられたのは、自己課題を何とか達成したいという強い意志と同時に、過去にガムテープを使った経験があり、その際のガムテープの粘着力の強さをセロテープとの比較の中で知識として蓄えていたからではないか。そのためA男はスムーズにその提案を受け入れていくことが出来たと考えられる。このA男の姿は、切り替える姿である。この場合、A男はセロテープで空き箱を固定するという自己課題に向き合っていたが、それが可能でないということに気づき、保育者に助けを求めた。その結果、今までの道具ややり方を捨て、新たな方法を取り入れたのである。A男は自ら、「こっちが駄目ならあっちがあるさ」と判断し、新たな方法と向き合ったといえる。このことによって、A男はガムテープを利用すれば固定することが出来るという、今までもち得なかった気づきを得ることになったに違いない。それは、今まで知らなかった新たな知識を築くことであり、新たな世界を知ることでもある。切り替える力が育つとは、今まで知らなかった世界を知ることに関わり、自分自身の現実世界を広げることに寄与する。

保育の場に切り替えることに困難を感じる子どもがいたとする。保育者は当然、早く切り替えられるようにと願うだろう。なぜなら、切り替えがしにくい子は、大まかにいって保育者にとって厄介な子であるからだ。そのため保育者は様々な手立てを講じて切り替える力を育もうとする。小玉(2019, p.113)は「保育者の多くは一人ひとりの子どもの実態を意識しながら、『みんなに同じことを同じようにさせる』を指向する集団主義自体が、子どもへの理解を歪ませる一端を担っており、常に子ども理解を見直す機会を十分に確保することが重要」と述べている。厄介だからという単純な理由だけではなく、「切り替える力が弱い」ということを「新たな世界を築くことが出来ない」という新たな観点で深く捉えたならば、その子の人生にとって切り替える力が弱いということが如何にマイナスにはたらくかに初めて目が向く。

以上の考察からは、長期的な視野で保育を進めていくことの重要性が見て取れる。諦めない力もその場の保育だけではなく、長期的に育成していくものであり、その子どもが生きていく上で重要なことである。また、厄介であるからという狭い理由で支援

を行うのではなく、その子どもの将来に渡る成長、つまりは「生きる力」まで見据えて育てていくことの大切さも分かる。つまり、長期的な広い視野、生きる力という視点をもってその子の育ちを捉える力も重要ではないだろうか。

2 事例2—3歳児B女とC女の事例—

(1) エピソード「トラブル的一幕」

3歳児のB女とC女が2口ガスコンロの前に立ち、鍋をかけ料理作りを楽しんでいた。時折会話を交わしながら、鍋の中に入っている水と花びらをへらでかき回していた。しばらくすると2人の間でトラブルが起き、C女が泣き始めた。C女が泣いていることに気付いた担任が2人にかかわり始めた。①担任は「なぜ泣いているの?」とまずC女に尋ねたが、C女は「Bちゃんが、Bちゃんが…」というだけで、状況が分からなかった。次にB女に尋ねるが、B女も「Cちゃんが…」とまではいうのだが、次の言葉が続かない。すると保育者が「Bちゃん、優しくいってあげた?」と伝えた。これは普段からB女はC女に対して強い調子での物いいが多いらしく、それがきっかけでC女が泣いていたのではと予想したことからの発言だった。ただ、その問いに対してB女は何も答えなかった。しばらく担任は2人の近くにいながら「仲良く遊べるといいね」などと声をかけその場から去った。その間にC女も少しずつ落ち着き、再び遊び始めた。担任がその場から去って1分ほど経ったころ、B女がC女に「(泣き止んで)よかったね」と声をかけ頭をなでた。②それに対してC女が「Bちゃん怖い」とB女に訴えた。ただその後も、C女はその場から離れようとせず、活動を続けた。10分程経ったころ、③C女がリングをプラスチックの包丁で切りながら「これ堅い」と独り言のようにいっていた。すると、その横でキュウリを切っていたB女が「これやて」と自分がキュウリを切っている様子を見せた。するとC女はB女の言葉をすぐに受け入れ、キュウリを取りに行った。

(2) 読み取りと考察

幼児の感情の動きに寄り添い幼児の心の動きを推測する力

3歳以上児の領域「言葉」では以下のような内容が示されている。

内容2「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりの言葉で表現する」

内容3「したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする」

内容4「人の話を注意して聞き、相手に分かるようには話す」

(厚生労働省, 2018, pp.251-253)

また、領域「言葉」の内容の取扱いでは「言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されてくものである…(後略)」(厚生労働省, 2018, p.260)とされている。このように保育では、自分の感じた世界を言葉で表現出来るようになることや、相手が何をいおうとしているのか分かるようになる育ちが求められている。そのために保育者が子どもにとって親しみのある存在として位置付くことによって、子どもが他者に伝えようとする気持ちが生まれ、それに応答的にかかわることによって、言葉の発達が促されていくことが読み取れる。

さて、3歳児は語彙も増え、巧みに言葉を使いこなせるようになっていく過渡期でもある。しかし、心の中で感じたことが多くあったとしても上手く言葉で表現出来ず、葛藤することが多い時期でもある。そのため、①のように上手く自分の感情を言葉に置き換えられず、言葉に詰まったものと思われる。感情を言葉にするのは、自分で感じた世界、つまり実物として見えない世界を言葉に表す営みである。また感情は常に動くものである。それを的確に言葉に表すことが子どもにとって難しいことは容易に想像出来る。とりわけ、子どもの今の気持ちが特に不快感情である際、何故そのような心の動きになったのかという過去の事象に目が向けられなくなる傾向にある。これは大人といえども同じであろう。

保育者はトラブルが起きた時に、一刻も早くその原因を探ろうとする傾向にある。そして解決出来ないと、過去に遡りその原因を予想しようとすることが多い。それがこの保育者の発言を誘発していると思われる。しかし、それを上手く言葉で表現出来な

い幼児にとっては、その感情の乱れにまずは寄り添い、その乱れた気持ちを受け止めるということが大切なのかもしれない。こうした子どもの感情の乱れに寄り添い共感的に受け止める力も重要ではないだろうか。

子ども達の関係性の歴史に思いを馳せる力

③ではC女は素直に包丁で切れないことを言葉で表現している。そのように自分が出来ないことを素直に表現出来るのは、自分が助けを求めたときに助けられた体験に裏打ちされていると思われる。また、C女にとってB女は、日頃から助けてくれる存在として位置付いていると考えられる。あるいは憧れを抱く存在でもあるのかもしれない。またB女にとっても、C女は助けてあげたいとする自分の優しさを表す対象になっているからこそ、2人のこうしたやりとりが実現したのである。このように相手が困っている思いに気付くことが出来るのは、元を正せば行動を共にすることで、自分が楽しいと思っていることを同じように楽しいと思える体験を何度も積み重ねることが出来たからではないだろうか。また素直に相手の助けを受け止められることも、自分に対して不利益になるようなことをB女は教えないという確信があるからであろう。

このように、一つの場面に表れる子ども同士の微妙な関係は、それまでの幾度にも及ぶかかわりの積み重ねの結果として生まれてくるものである。そのように考えるならば、その子達のかかわりの歴史に思いを馳せる力も重要であることが見えてくる。

子どもに関する分からなさをもち堪える力

保育者はトラブル場面において、原因を互いに考えさせ、どのようにすれば、そうしたトラブルが起きないかを考える場面をもてるように援助する傾向がある。しかし、この一連の2人の行動の変化を辿ることで分かるのは、保育者から問われた時にどうしてそのような状況になったのか言葉で説明出来なかったとしても、時間が経つにつれて自分達で解決の方向へ歩き出しているということである。事例においても、相手が嫌だったのだろうという思いに気付き、その気持ちが変わっていく様子に安心したり、

相手に自分の不快だった思いをはっきりと伝えたりする過程があった。このことから、子ども達はそれぞれの思いをある時はぶつけ、ある時は受け止めるという行為を繰り返しながら、その場が心地よい状態になるように無意識に他者にはたらきかけ、解決策を見出しているように感じる。つまり、保育者にとって「何となく解決されていく過程」「何となく状況が変わっていく過程」をゆっくり見守ること、あるいは、その過程をもち堪えることが大切と考えられる。

また③からは、新たな遊び(包丁で切る)の展開や、新たな物の登場により、それに気持ちが向き、不快感情が過去のものになっているように捉えることも出来る。吉田(2010, p.14)は「環境にある様々な事物現象について、…(中略)…経験することが子どもの興味や関心を高めると共に、次の活動への意欲を持続することになる」と述べている。これは不快感情について述べられたものではないが、事例と合わせて解釈すると、環境の変化も子どもの心の動きを左右する重要な要因の一つになっていることが読み取れる。このように、自分なりに不快な状況乗り越えていこうとする時には、様々な要因が絡んでいることも理解しておく必要がある。

以上から、子ども同士の関係性の構築で保育者に求められるものは、幼児が複雑な心の動かし方をする存在であり、その機微に触れたり、その子の育ててきた歴史に目を向け解釈したりする力であることが分かる。また、大人が早期に解決を求めず、時間をかけ、彼らがどのようにトラブルに向き合っているかを丁寧に見つめることも求められているだろう。つまり、保育者にとっても、幼児同士の人間関係で起きる「分からない」という感覚をもち堪えるということが求められる。こうした「分からなさ」をもち堪える力も重要であろう。

3 深い幼児理解をするために

事例1・2についてさらに深く読み取り、観点を整理してみることにする。

事例1の上手く固定出来ず保育者に助けを求めるA男の姿からは、保育者との信頼関係の育成が読み取れると同時に、見方を変えれば、出来ない自分や限界を冷静に受け入れ、自己課題達成のためにこれからをどのようにしていくかを考え、実行に移すと

いう力の発達を捉えることが出来る。ただ、こうしたケースの場合、自分の力で最後まで課題に取り組む力の育ちを期待するという捉え方もあるだろう。しかし人が生きるためには、様々に降りかかる課題に対して、一定の向き合い方だけではなく、柔軟にその課題に立ち向かう方が生きやすくなるとも考えられる。そうした見方をする事で、保育者の子どもへの向き合い方も変わってくるはずである。

また事例2の②からは、B女とC女の間に強者・弱者の関係性が存在することが読み取れるが、一方で見方を変えれば、C女が、泣くことで嫌な気持ちを表現し、時間が経てば言葉で直接伝えられる姿からは、2人が強者・弱者という固定化された関係性ではないことが読み取れる。その後も2人が離れずに同じ場で同じことをして遊んでいられるのは、お互いに一緒に居ることが心地よいからである。つまり、この2人の間には、周りの人間には計り知れない微妙な力関係が存在していることが予測出来る。このように子ども同士の関係性は、それほど複雑であり、白黒ははっきりつけられるものではないことが分かる。そのことを理解することで、保育者の子ども同士への介入の仕方も当然変わってくる。

本項でのキーワードは波線にあるように「見方を変える」ということではないだろうか。今までの事例分析では、深い幼児理解をすることでこそ見えてくる保育者の在り方・専門性が多々あること、また深い理解によって、かかわりや援助が変わっていくことが読み取れた。これらは子どもを深く捉えなければ見えてこないものである。同時に以上からは、「見方を変える」という、深い幼児理解をするに当たって必要な、保育者の専門性を示しているように思われる。

この専門性を整理すると、以下の2点になる。

- ・一つの事象に対していろいろな捉え方が出来る柔軟性
- ・一つの事象を自分の思いで一方向的に決めつけない力

4 養成校において求められる学び

今までの事例分析により、保育者に求められる専門性について8点明らかにした。最後に、これらを踏まえ、養成校をどのような学びの場にする必要が

あるかについての視点を、以下に簡潔に整理した。

- ①幼児理解には正解はなく、寧ろいろいろな捉え方が出来ること自体を、面白がれるような考え方を重視した養成
- ②目に見えない子どもの心の動きを、敏感に察知出来る姿勢を作る養成
- ③自分の捉えを、「思い込みかもしれない」と考えるための構えを作る養成
- ④子どもが活動を生み出す様々なプロセスの存在に思いを馳せ、ともにその過程を楽しみながら寄り添うこと、また保育者の予測を裏切るような活動が生まれるだろうことを期待し待つことが出来る心を育む養成
- ⑤「この活動でこの育ち」というような短絡的な発想ではなく、子どもの未来の育ちに繋げるために、今の姿をどのように読み取るのかという視点を育む養成
- ⑥方法論ではなく、長期的スパンで子どもを読み取ることの価値を伝えられる養成

IV まとめ—提言—

本研究は、現代の若者の実態を鑑みたとき、保育者になった際、本人にとっても子どもにとっても、その成長を妨げることになるのではないかという危惧から始まったものである。その結果、改めて保育者が視野を広げ、深く幼児理解をすることの意味やそのための専門性、そして、浅い幼児理解では辿り着けない保育者としてのより深い専門性について明らかにすることが出来た。さらに、それらを養成校で育成していくことの必要性及びその際の視点について言及することが出来た。

表1は最初に述べた現代の学生の課題と、今回明らかになった8つの専門性を対応させたものである。これら専門性を養成校で育むためには、前項で述べた養成校をどのような学びの場にするかの視点を、各養成校が捉えた上で、養成に臨むことが重要ではないだろうか。より深く子どもを捉える力を涵養しながら、今まで明らかになった専門性を育む過程を重視した養成を行う必要があると考える。

表1 学生の課題と専門性

学生達が抱える課題	幼児理解を深める中で育つ 多様な専門性
学生自身の願いを優先させてしまう	子どもが主体となり活動を 生み出す過程に寄り添う力
	保育者が予想した活動以外 の活動が生まれてくること を期待をもって待つ力
短期的な視野でしか 捉えられない	生きる力を身に付けるとい う観点で、広く長期的な視 野からその子の活動や育ち を捉える力
一面的な見方からし か捉えられない	一つの事象に対していろい ろな捉え方が出来る柔軟性
表面的な捉え方しか 出来ない	幼児の感情の動きに寄り添 い幼児の心の動きを推測す る力
一方的に決めつけて 捉えてしまう	一つの事象を自分の思いだ けで一方的に決めつけない 力
その子の今しか捉え られない	子ども達の関係性の歴史に 思いを馳せる力
早く結論を出そうと する	子どもに関する分からなさ をもち堪える力

各養成校においては、文部科学省発行の「幼児理解に基づいた評価」(文部科学省, 2019) や、保育所保育指針解説等にも幼児理解の重要性が記されているため(厚生労働省, 2018)、長期的にじっくり子どもを捉えること、その理解を深めることが重要であることは当然理解した上で養成が行われているはずである。しかし、わずか2年や4年という短い期間で、かつ座学中心の場において、そのような専門性を育むことにそこまで時間をかけられない現状がある。そのため幼児理解といえど、内面理解に及ばない現象のみの理解や、大人側の一方的な読み取り、教科書的かつ観念的な捉え方に留まる等、効率よく理解の方法論のみを学び、後は現場でという養成にならざるを得ない面もある。

また、幼児理解の質を上げることは、保育現場においても課題になっている。例えば「子どもの気持が分からない～新人保育士が悩みがちなこと～」というHPでは、その悩みと対処法について記載があ

り(保育士さんの悩み.com, 2019.8.12閲覧)、現場においてさえ、幼児理解や子どもの育ちの読み取りに苦勞をしており、その対処法を求めているのである。だからこそ少しでも養成校において、これらを意識的に身に付ける必要があるのではないだろうか。そして、そのための手立てを今後考える必要があると強く訴えたい。

今回整理した専門性は、現代を生きる学生にとってみれば、自分自身が抱える課題を乗り越えてこそ得られる専門性である。養成校において、そのことをしっかりと教員が受け止め、学生達が抱える課題を、保育者として現場へ出る前に少しでも乗り越えられるような養成が求められていると考える。

おわりに

今まで、保育者の専門性について、深い幼児理解を足掛かりに捉え、養成校として必要な視点を考えてきた。しかしながら、幼児理解の前段階において大切なことがある。それは、子どもが好きという気持ちや、子どもを一人の人格として尊重し向き合う態度である。また、思考する面白さを感じられることも重要であろう。これらはその人の人間性である。保育という営みは、保育者の人間性と子どもの人間性が交じり合うことによって織り成す産物である。これは「保育は人なり」という言葉に集約されるように、保育者の人間性は子どもにとって大きなモデルとなり、心の安定や安心は、保育者との関係性によるものが大きいのである(井桁, 2010)。そういった、幼児とかかわる上での土壌となる部分こそ養成校においてしっかりと耕すべきことを忘れてはならない。そして、その土壌の上に、深い幼児理解等の専門性の育成を行うべきである。さらには、そこで得た自己の捉えを常に見つめ直すことも重要であろう。浅井(2019, p.132)は「省察は、保育者の楽しみの一つであるとされている。思い込み、前提、前例という過去の縛りを取り除き、保育者自身が得たイメージや共感を通じて、想像力や創造力を駆使して自由に考えを巡らす…(中略)…未来に向けて考えるから楽しいのである」と述べている。省察とは、自己の子どもとのかかわりを振り返り、そこで得た反省・考察を、次の子どもとのかかわりへと活かしていくことである。常に自己の幼児理解

を問い直し、保育をよりよくしようとする姿勢、そしてそれを楽しいと思えることも大切だと考える。

本研究は提言という形で閉じることとする。今後は、養成校において深い幼児理解をするための手立てや、明らかになった専門性を育むためのプログラム等について、本研究で捉えてきた視点を参考に考えていきたい。

引用文献

浅井拓久也 (2019). 省察的実践者としての保育者を考える 上中修 (編著)

Professional をめざす保育者論 (pp.131-134)
教育情報出版

保育の悩み.com (掲載日不明). 子どもの気持が分からない～新人保育士が悩みがちなこと～
[http:// 保育士の 悩み.com/not-understand-feeling-of-child.html](http://保育士の悩み.com/not-understand-feeling-of-child.html) (2019.8.12アクセス)

井桁容子 (2010). 保育所の場合—0・1・2歳児保育における保育者の役割 汐見稔幸ら (編著)
保育者論 [第2版] (pp.81-92)

椛島香代 (2008). 保育における幼児理解のあり方—保育学科学生の幼児理解の実態分析を通して—
— 文京学院大学人間学部研究紀要10巻1号 69-82

北村麻樹ら (2018). 学生の子ども理解につながる学びの現状と課題 奈良佐保短期大学研究紀要特別号 47-54

小玉幸助 (2019). 「気になる子」と特別支援教育 上中修 (編著) Professional をめざす保育者論 (pp.112-116) 教育情報出版

厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説 フレーバル館

文部科学省 (2019). 幼児理解に基づいた評価 チャイルド本社

室田一樹 (2016). 保育の場で子どもを理解すること—エピソード記述から“しる”と“わかる”を考える— ミネルヴァ書房

田畑和彦 (2018). 現代の若者の「つながり」志向 (2): 「希薄化」論の再考 静岡産業大学情報学部研究紀要20巻 217-243

吉田淳 (2010). 保育実践を支える環境 福村出版